



財務省の強大な権力を警告した森永卓郎氏の著書「ザイム真理教」書いてはいけない」の真実性が社会に衝撃を与えている。「命あるうちに世に問いたい」と、日本のメディアが避けてきたタブーに、決死の覚悟でメスを入れた作品である。

「がつちりマンデー!!」などにテレビ出演し、明快で味のある発言で知られる経済アナリストの森永卓郎氏は、2023年末に「原発不明がん」ステージ4と診断され余命4か月と宣告されたが、オプジーボとNK療法の効果もあり闘病生活を続けている。テレビから干されているが、現在もラジオやYouTubeを通じて刺激的な発言と執筆活動を精力的に行っている。著書が30万部も売れているにも関わらず、新聞やテレビのオールドメディア

「知ってはいけない」「書いてはいけない」

—日本の医療政策の闇—

情報広報部 山科 賢児

に取り上げられることは一切ない。「ザイム真理教」の題名は、財務省を一種の「カルト教団」と例えた批判的な比喩である。財務省が増税にこだわる背景には、財務省が信じる財政均衡主義と官僚が出世や好条件で天下りするために増税が条件という「神話」があり、それによる財政緊縮策が日本の経済成長を妨げ、大企業は潤い国民の生活は貧しくなり「衰退途上国」に転落したと指摘する。また、財務省の権力の実体を批判的に書くメディアに対しては税務調査などで経済的圧力をかけた結果、メディアは権力の監視役とはならなくなり、「知ってはいけない」「事実を報道しなくなった」と述べている。「書いてはいけない」では予算配分の実権を握る財務省の力、日航機123便の墜落の

闇に隠された真相と隠蔽工作や、日本経済の衰退の真相など、いかに権力が闇の中で関与しているかの信憑性が論じられている。権力の闇を暴こうとした理由は、強い使命感と正義感に基づいていると思われるが、さらに彼が末期がんの告知を受けたことも執筆の大きな動機となっている。どうしても書いておきたい事実を世に問うことを決意し、「知ってはいけない」ことを命ある限り伝え、日本のメディアや権力構造の問題に対し孤独であるが飄々と戦っている。一部には主観的すぎるのではないかと、過激な表現ではないかと意見や批判はあるが、「書いてはいけない」社会問題に切り込む森永氏の姿勢は評価されているのではないだろうか。この20年間に日本の医療情勢には大きな変化があった。高齢化に伴う医療費の増加や医療従事者の不足は深刻である。新型コロナウイルスのパンデミックの感染対策や治療に莫大な費用を費やし、医療保険制度の財政的基盤を揺るがしている。また原料の高騰と薬価改定の度の薬価のダウンは医薬品の供給不足を招き、医療現場では薬が手に入らなくなっている。世の中の物価はインフレで上昇しているが、国民健康保険制度は一種の社会主義経済であり、診療報酬は上がらずむしろ下がる傾向である。国民皆保険制度に影響を与える財政環境も変わった。以前は中央社会保険医療協議会(中医協)が医療政策に絶対的決定権を持っていたが、2004年の不祥事をきっかけに財政制度等審議会財政制度分科会(財政審)の影響下に置かれ、医療財政や医療政策の決

定の方が財政審に移り、財務省が日本の医療をコントロールすることとなった。この傾向は新型コロナウイルス以降さらに強まっている。財政審は、ほとんどが経済学、財政学や経営学などの専門家と大企業の経営者で構成されている。医療政策に関する具体的な専門知識や現場の視点は厚生労働省や中医協が補完し、財政審が政策を検討と提言を行うというが、医療の経験のない委員たちが財政や経済の観点から医療政策を最終的決定するのは奇妙であり、医療現場の声が果たして反映されるのか危惧せざるを得ない。財務省の医療政策に対し、「医療現場の実情を無視している」「診療報酬の削減や医療体制の見直しは医療の質を低下させる」などの批判的意見は医療の質を低下させるなど協などには決定を覆す力はない。その結果財務省の意向に沿った医療政策が、医療現場に徒労と荒廃を引き起こしている。官僚の頂点に立つ財務省は、医療も含め財政政策において重要な役割を果たしている。一方政治家に強い影響を及ぼし、財政の健全化や消費税について「ザイム真理教」に転向した政治家も見られる。しかし政策決定の際に現場の声を取り入れて議論を尽くすことが民主主義の根幹である。このプロセスを経ることとで合意形成が可能となり、医療政策への国民の理解も深まるのである。ここ10年間の医療現場はさらに悪化の一途を辿っており、医療現場はもう忍耐の限界である。財政を司る相手と交渉するには、医療の窮状をただ訴えているだけでは太刀打ちできない。医療へのビジョンを示し、医療だけでなく社会や経済全般について堂々と論陣を張らなければ、医療と異なる世界に生きている官僚、有識者や大企業のトップを納得させることはできない。